

心理学の課題と哲学

——ウィリアム・ジェイムズの場合——

良 峯 徳 和

序 問題設定

本論は心理学という学問に対し、絶えず投げかけられてきたきわめて特異な疑問に関して、その本質的な問題の所在を明らかにすることを主な目的としている。その疑問とは、学問領域中の「心理学」と呼ばれている集合体が、一つのまとまりをもった科学的な学科として、さらには自然科学の一学科 (Fach) として既に成立している、あるいは将来的に成立しようと主張できるかどうかという問題である。

心理学という学問が科学と呼ばれることに対し、心理学の内外を問わず、これまで多くの不信の念が表明されてきた。例えば、コック (Sigmund Koch) は「心理学は一貫した科学とはなり得ない」と題された論文の中で、次のように述べている。

心理学が科学として、すなわちなんらかの一貫した統制原理として、人間に関する経験的な研究に貢献してきたという問題は絶え

ず誤認されてきた。……人間に関する実証的研究に統一を打ち立てようと費やされた百年もの歳月に及ぶ努力にはほとんど成功と呼べるものがない。⁽¹⁾

なぜ他ならぬ心理学に限ってこのような深刻な問題が常に付きまとうてきたのか。はたしてそれは心理学に対してなされるべき正当な評価とみなせるのかどうか。その問題を心理学の出発点に立ち戻って、一人の心理学者の目からもう一度考え直してみるのが本論の目的である。

一 ジェイムズ心理学「科学」への願望

心理学が一九世紀末のそもその出発点から哲学的な諸問題を抱え、それに対してはつきりとした対応策を施すこともなく、学としての体裁を整えるよう余儀なくされてきたということを、誰よりもはつきりと自覚していたのは、哲学や生理学などの強い影響力からなかなか抜けきれない状態にあった心理学に、自立への方向を指示

し、またそのための決定的要因を自らの手で生み出すことに成功したウィリアム・ジェイムズ自身であろう。このことは彼の『心理学原理』(The Principle of Psychology)及び教科書用に編集し直された『心理学(短縮版)』(Psychology: Brief Course)が、当時の心理学書としてはいかに破格の出版部数を記録したかによって示される⁽²⁾。ジェイムズがその著作、特に『心理学原理』によって当時の研究者たちに、心理学はいよいよ自然科学の一端を担う独立した学問となったという印象を与えたことは間違いない事実である。そのことは、ジェイムズの『心理学原理』がしばしば「心理学の独立宣言」とも呼ばれていることにもよく表れている。

しかしながら、そのようなジェイムズをしてみても、近い将来、心理学が一つの自然科学としての地位を獲得しうるだろうといった樂觀的な期待をしていたわけではない。それどころか、ジェイムズは心理学が自然科学と呼ばれるにははるかにかけ離れたところにある⁽³⁾、それが単に「願望」であることをはっきりと言明している。つまり、当時の心理学は「ガリレオ以前の物理学、ラヴォアジェ以前の化学」であって、心まつわる「現象上の記述、逸話、そして、神話の集まり」でしかない、というのである。

ではジェイムズは心理学がいかなる条件のもとで統一的一个の科学たることができるかと考えているのだろうか。この「統一的一个の科学」という言葉からも分析されるように、ここには心理学に要求されている二つの大まかな条件が指示されている。第一に、心理学はいかにして「科学」たることができるかという課題であり、第二には、心理学はそのもとで一つの学科として統一されるような

何等かの統制原理あるいは方法論をもち得るかという課題である。但し、後にみるように、心理学では、この二つの視点が相互に絡み合っており、簡単に切り離せない深刻な危機的状況を形成しているため、ここでの二つの問題設定はあくまで議論を明確にするための手掛かりであると考えなければならない。

二 ジェイムズの科学観とプラグマティズム

上で述べたように、ジェイムズにとって少なくとも当時の心理学は、哲学や生物学(生理学)の影響下から完全に抜け出しきっていないままに、見切り発車を行った「科学への願望」でしかなかった。通常の諸学科は、長期にわたるひとびとのさまざまな発見と探求にともなう、次第に諸手続き、諸規則が集まり、それらが自然発生的に科学のうちのある特殊部門を扱う学として成長し、体系づけられていったものと見なされる。しかしながら、心理学の場合、順序が逆で、さまざまな領域で既に成功を納めている方法等が「心」の領域に应用されることにより、同様の成功を獲得することができるという樂觀的な予測のもとで、「心理学」が生み出されるに至ったのだと考えられる。コックの表現を借りれば、「その制度化が内容に先行し、方法が問題に先行する度合が、創設期における心理学の特異性を表現していた」わけである。

このような未熟状態にある心理学が科学的な一学科として自立するためには、まず何を必要とするか。この問いに対するジェイムズの答えは、歴史的にみても、必ずしも真新しいものではない。ジェイムズは、かつてデカルトが学問に対して徹底的な明証性に基つ

合理的な基礎づけを要求する一方で、道徳や宗教に対しては、將來、より確定的な道徳原理が定立されるまでの間、その都度の状況の中で最も広く承認されている常識的な意見に従うべきだといひわゆる「暫定的道徳」を主張したのと同じように、実践的活動としての科学的探求は、広くこの世界において認められている物質相互の因果関係や法則性などの基本的性質をそのまま受け入れるところから出発し、物事の究極的實在に関わるような形而上学的な諸問題については、それを専門的に扱う哲学者に譲渡し、任せるべきであるとする科学—哲学の暫定的な二分割説を主張したのである。

そもそも自然科学とは何か。それはまったく実践上の有効性のためだけに、真理の総体から分割し、取り出された断片に過ぎない。つまり、分割して統治せよ (Divide et impera) である。個々の特殊科学は、それ自身のみ関わる個別的な真理を獲得するために、数多くの便宜的仮説を設けて、それについて人間の心が絶えず疑問を発するような問題については、責任をもつことを拒まなければならぬ。

これを心理学について当てはめるならば、次のようになる。心理学はまず、自らの探求領域を科学的な前提が問題なく成立し、科学的方法が順当に適用できる領域へと制限しなければならぬ。いかえれば、心理学が科学となるには、あらかじめ科学的には決して結着のつかないような形而上学的な問題群を自らの領域から排除しておかなければならないのである。このことは、同時に心理学が

長い間抜けきれないでいた哲学的思弁の歴史から脱却することを意図していると考えられる。またそこには後のプラグマティズムの考え方に通ずるようなジェイムズ特有の自然科学観も反映していることを見逃してはならない。

ジェイムズにとって科学とはそもそもその出発点において、人間、そして人間の社会にとって、実際上有効な知識を求めて続けられてきた実践的探求活動そのものであった。もちろん科学に含まれる一切の要素、すなわち科学的な概念や理論、法則、方法などがすべて人間の実際の必要性から生じてきたと考えているわけではない。それどころかジェイムズは科学の最も原初的な形態、ならびにその概念、思考法といったものは、そもそもある人間の脳裏に偶発的に生じた一種の突然変異的産物であったとすら考えている。そして実際上の必要性、有効性が働きかけるのはその後の事柄とされる。つまり偶発的にであれ、自然発生的にであれ、新しく生じた考え、いかなれば事物についての一種の仮説はそのまま何にも使われずに放って置かれるだけならば、ほどなく永久的に消え去って失われてしまう運命にあるが、それが現にある何らかの問題状況と結び付き、ある具体的な有効性を示す、あるいはその兆候を示すならば、保持され、さらに発展させられていく可能性が開けるのである。いうなれば、科学的な概念や仮説は、現実の問題解決に何らかの有効な形で適用可能であることが思考上あるいは具体的な場面で実証されて初めて存続する価値のあるものとして保持されていくことになるというのがジェイムズの基本的な主張である。

科学とはこのように現実の問題状況の中で生きる個々人の頭の中

を行き交う様々な考えの中から、たまたまその状況に対して有効性を持ち得るものだけが取捨選択され、それが積み重ねられてきた人工的な構築物のことに他ならない。それゆえ、科学の歴史とは必ずしも、直線的でその端緒から包括的、合理的な構造を有しているわけではなく、既存の科学的諸学科の歴史を一瞥してみれば分かる通り、いずれも紆余曲折の行程を経て今日の形態を取るに至ったのであり、さらに今後どの様な形で展開していくかは誰にも予想のつかない事柄である。

さらに一方で、ジェイムズは科学がいかなる形態をとって進歩、発展していかうとも、科学によって得られた知識は、我々の経験全体からすれば、あとから付け加えられた経験の一部分であり、「経験の流れの一つの部分から他の部分に移って行くための人工的な近道にすぎない」と考えている。物理学の実験に代表されるような近代科学の方法は、元来は特定の経験領域の中でのみ著しい効果が上がるように発明され、発展させられてきたものだから、同じ方法が我々の生活の他の領域においても同等の効用を持ち得るかどうかが、さらにそれが当の現象の背後にある真実を捉えるのに本当に成功するかどうかということについては本来いかなる保証もないのである。むしろ、そういった疑問を逐一真剣に受け止め、いつまでも深くかかずらわっていることは、特定の問題領域内で一刻も早く実際的な結果を上げるといふ目的意識に貫かれた科学の個別的領野にとつては、かえって作業能率の低下を招き入れる危険が伴わないとも限らない。

そこでジェイムズは、ある活動領域が一つの科学的分野として成

立するためには、とりあえずその学問が自ら抱える諸課題に対してそれらを解決するために必要とされるさまざまな道具だて、理論、方法といったものをきわめて効率よく用意し、組織だてることが必須であると考ええる。その際、どのような道具だて、方法、概念がそのために用意され、選択されるかは、予め定まっているわけではなく、全く探求者の創意と一連の試行錯誤の手續きに懸かっている。つまり、

そこにありうるただ一つの問題は、最小の労力によって最も有効な結果を得るためには、いかに労力を分配したらよいかという実際上の問題なのである。(7)

当然このような目的合理性を原則とした活動領域では、当の問題状況を解決するために適した方法を、該当する科学者が最初からすべて発明しなければならないというわけではない。目的のために役に立ちそうな要素は、たとえそれが一見当の問題領域とはいかに無関係にみえようとも、他の科学部門、一般的生活の一場面等から引き削がされ、借用され、必要欠くべからざる方法として定着してしまふということもありうる。コックのいうように、心理学における方法論はほとんど全てが他の学問からの借り物に過ぎないという指摘は、まさに的を得た指摘ではあったが、ジェイムズにしてみれば、少なくとも今日定着しているかなりの数の科学の方法論、諸概念ももともとはある意味でどこかからの借り物であつて、別のところでも偶発的に生み出されたものが、保持され、さらに次々と移植される

がら今日に見られるような発展を遂げてきたものだということになる。

であるから、それだけの理由で心理学が「科学」とはなり得ないとする主張は当たらないのであり、ジェイムズのプラグマティックな科学観からすれば、「科学」を余りに合理的で首尾一貫したものと見なし、現実の科学の歴史といったものを考慮にいれていないということになる。

プラグマティズムの観点からさらにもう一つの科学の成立条件を述べるならば、個別的な諸科学はその領域で前提とされなくてはならない現象をそのままの現存する現象として受け止め、それ以上の実験的、理論的探求については、それらを専門に扱う他の部門に譲渡する方針を採らなくてはならないことである。

確かにある個別科学においてどこまでを現象上の定義だけで済ませ、またどこまでを科学的な分析の対象とするかは、その都度の問題の設定範囲、科学の発展段階状況、及び実験・測定器具の精度等によって異なるであろうが、少なくとも全ての要素を問題領域の中に取り込むことは不可能であり、そのままでは研究の実際上の進展など望みようもない。

ここでもやはり、最小の労力によって、最大の効果を上げるための労力の配分という実践的・暫定的な制約が科学的活動の大きな決定要因となってくるのである。

このことをジェイムズの時代の心理学に当てはめれば、心理学は一切の意識状態、もしくは心の状態をその解明すべき中心的な探求課題として持つ限り、その目的とする問題解決のために直接結び付

かないような諸問題、つまり他の科学的諸部門が扱うような諸問題あるいは物事の根本的な根拠に関わるような哲学的、形而上学的な諸問題については、当面の必要以外のものとして差し控えられざるを得ない。そういった実践科学の基礎づけに関係し、科学者の実際の活動の最中には十分に探求される余裕のない諸問題については、それらを自らの専門領域としている科学哲学の従事者、形而上学者に譲渡されるのである。

……もし心理学がともかくも他の自然科学の類型に当てはまるためには、「とりあえず」何らかの究極的解決に至ることをも断念し、物理的世界の存在、心的状態の存在、さらには心的状態が他の事物に対して認識を行うといった事実を所与のものとして無批判に承認し、通常の常識的基盤に立脚しなくてはならない。⁽⁸⁾

このようにジェイムズの自然科学としての心理学の構想では、それまで心理学の中で語られてきた哲学的な問いかけは、それが実践的な活動内容に直接関係してこない間は、不必要なものとして保留されることになる。

このことはジェイムズが心理学の研究対象として、従来よりも心のもつ機能的側面・実践的側面を重んじ、そのために、アメリカにおけるいわゆる機能主義心理学の先駆と呼ばれていることとも関連している。心理学が純粹に心に関する理論的側面だけに関係するのではなく、広く教育、医療、人間管理といった社会における実践的要求とも大きく関わっていることは、今日の心理学に含まれる教

育心理学、臨床心理学、社会心理学などといったさまざまな活動領域を一瞥するだけで明かである。ジェイムズの「自然科学としての心理学」構想は、このような社会のさまざまな方面からの要請にも答えるものであった。

我々は如何に行動すべきかを教えるような心理学的科学を絶えず求めている。全ての教育者、全ての牢番、全ての医師、全ての牧師、全ての精神病院監督は、心理学に実践的な規則を求めている。これらの人々は、心的現象の究極の哲学的根拠などはほとんど問題にしないが、その取り扱うべき個々人の思想、傾向、行為を改善することに⁽⁹⁾ついては、非常に深く考えている。

しかしながら、ジェイムズは科学としての心理学がたんに心に関する実際上役立つ諸規則を探索して明らかにすればよいと考えているわけではない。ただそれだけならば心理学が特に自然科学になる必要もないのであり、むしろその際重要となるのは、心というものを見る見方にあるのである。

三 心の自然化

ジェイムズは心理学が自然科学の一部を形成する限り、心理学者は心を自然の一部として、すなわち物理学者や生物学者と同じようにその対象を自然法則的 (law-governed) 存在としてみなさなければならぬとしている。ただし、これもあくまで心を科学的心理学の対象として扱う限りにおいてという条件のものであることを忘れ

てはならない。つまり、ジェイムズ自身は心に自然法則的に把えられうる側面と決して把えられないような側面との両面が存在する可能性を予め認めているのであって、自然科学としての心理学はあくまで前者にのみ関わるという領域区分を行っているにすぎない。歴史的にみれば、それまで心を探求の対象とした多くの学者は心が根本的に自然の法則には従わず、むしろ心には心独自の法則性、例えば目的論的法則性といったものがあって、それは一般に自然科学の範疇内では把えられないということが強調されてきた。それに対してジェイムズは、心にはその全てではないにせよ、因果律のような自然法則によって把握され得る領域が少なからず存在し、そのような領域をより正確に規定していくことは実践的要求に答える上でも、心理学に課された重要な課題であると考えたのである。次に掲げるジェイムズの言葉はそのことをはっきりと裏付けている。

……我々の存在、さらに心の存在のある側面にも、自然の歴史の領域に完全に組み入れられるものがある。この世に生を受け、そして死んでいく個々人の内的生活を構成するものとして、我々の意識状態は通常の自然の運行に属する時間的な出来事である。さらに、その出来事その都度の生起・不生起の条件は、確かに大部分が物理的世界に属する。しかしそれだけではない。これらの出来事の諸条件を大きなスケールで制御することは、その他の物理的自然の制御が比較的些細に見えるくらい、実際上の意義のきわめて高い事柄である。⁽¹⁰⁾

ジェイムズの心に関する自然主義的な解釈は、もちろん当時ジェイムズだけに特徴的な傾向ではなく、スペンサー、ダーウィンといった進化論思想に端を発し、当時の科学実証主義的な風潮と相俟って、広く知識人の間で成長してきた思潮であった。パース、デュエイトといった他のプラグマティズムの哲学者達と、他の点にもまして基本的信念として共有していた点も、実はここに見いだすことができる。いふなればジェイムズの心理学は心を自然主義の立場から解釈しようとする最初の組織的試みとして位置づけることができるのである。

ジェイムズのなした仕事は心の哲学における自然主義的な公式化の最初の試みといえる。自然主義の観点からすれば、心は形而上学的で不可思議な性格を一切伴わない。……自然主義者は世界を物理的対象とその属性、及びそれらの間のさまざまな関係から構成されているものとみる。しかしながら一方で、自然主義者は、自然主義の立場から解釈された心的な現象がごく単純な機構の単位、例えば個々の反射反応から構成されているといった立場を拒否するところから、伝統的な唯物論の立場とははっきり区別される。……すなわち、十分に成熟した心的現象は、「それを説明するのに」精神主義的 (mentalist) な分析を要するのである。(11)

さらにこのフラナガンのことばはジェイムズ心理学の自然主義的側面が伴うもう一つの特徴を的確に捉えている。それはジェイムズ心理学が、いわゆる伝統的な心身二元論に対し、それを容認する立

場とも、拒否する立場ともいえないきわめて曖昧な態度を示しているように見えることである。

ここで注意しなくてはならないことは、ジェイムズは確かに自然主義の立場から心を解釈しようとしているが、それは必ずしも伝統的な意味での唯物論の立場と同じではないということである。例えばデカルトは動物が心を持たず、ものの側に属する存在であることを、それが精巧に組み立てられた機械であることに例えている。しかしながら、ジェイムズが生物を語る際に絶えず念頭においていることは、それらが、単なる自動機械 (automaton) ではないということである。

下等動物の動作や高等動物における下級神経節の動作を見ていて、最も強く感じられることは、与えられた刺激に対するその反応が確定していることである。それに大脳皮質が加われば、すぐさまその結果にある予測不可能性が導入され、この予測不可能性は人間はかなり大きく発達した大脳回転部において、最高度に達する……人間の脳においては、感覚に与えられた印象が、全くかけ離れて予想のつかない動作をさせることは、余りに周知の事(12) 例証を必要としない。

この言葉はジェイムズが生物を進化の全歴史を背景に持つ存在として、単なる人間の発明物である機械のような存在とは比較にならないと考えていること、そして、そのような進化の過程を経て初めて獲得されるに至った大脳組織が持つ反応の複雑さ、精妙さは、機

械のような人工的な発明物のもつ複雑さとは比べものにならないという確信をはっきりと表現している。

心に関する進化的な見方については、ジェイムズに先立ち、すでにダーウィンやスペンサーらが、特にその本能や感情的側面を中心に、その先駆的な業績を残していたが、ジェイムズはそれらの業績を受け、更に心の高等な働きについても、進化論を前提とした機能主義的な立場からの分析を行おうとしたのである。

ジェイムズによれば、生物の進化にともなうて大脳組織は複雑化を極め、かえって不安定な働きを見せるようになり、ともすれば偶然性に支配されないとも限らないほどになった。そこで心の高次の機能は組織に付け加えられた一種の付加器官として、状況に応じ、脳に対してある種の方向性を与え、不必要に偶然的な反応を生じないように制御することにあるのではないかという。

このような見解はあくまでもジェイムズ自身の心に関する仮説の域を出るものではない。しかし、心的な現象を自然主義の立場から捉えつつ、そこに素朴な形での機械論に代表されるような唯物論的分析を許そうとしないジェイムズの態度には、心を簡単により下位の構造物へと還元して説明しようとする風潮への強い反抗意識が表現されている。

ジェイムズがあくまで心を還元主義的な分析の対象としなかったことは、彼が心的な現象をできるだけ日常経験するがままに記述しようとしたことによく現れている。この記述様式が唯物論的、あるいは還元主義的な記述様式とはっきり区別される特徴を持っているのは、心の日常的な記述様式には絶えずある種の二項的な関係が

反映されているからである。この二項関係は、今日的な表現を用いれば、いかなる心的現象も主体の主観的な観点からみたその対象についての何等かの態度を表明しているものである、という心の志向的性質 (intentionality) に基づくものである。

ジェイムズは心的現象の志向的性質をデカルト的な心—物二元論とは区別される「知者—被知者二元論」として描いている。前者が存在論的レベルでの二元論だとすれば、心の志向性を反映しているのは認識論レベルの二元論だといえよう。

認識は徹頭徹尾二元論である。つまり、知る心と知られるものという二つの要素を仮定し、それらがそれ以上は還元され得ないものとして扱う。どちらも自らを出て、他方へ入り込むことも、あるいは、何らかの形で他方になることも、他方を作り出すこともできない。両者は共通の世界の中で相対し、ただ一方がその相手を知り、あるいは一方が相手に知られるのみである。この単一の関係は、より低次の名辞によつては表現され得ず、より理解し易い名称に置き換えることもできない。⁽¹³⁾

このような心的現象に特有な二項関係については、それが通常の客観科学で用いられているような観察方法、すなわち対象を外からしかもできるだけ私見を排した表現を用いて記述するといった方法をもってしては捉えられないことは明白である。そのような観察方法で捉えられるのは、それを観察している主体の心理状態、心的態度とは無関係に抽出されるような外的なものの世界であり、心理学

の問題領域となっている心、もしくは意識の世界ではない。

したがって、必然的に心理学は自らの対象を観察するのに適した、しかも客観科学の通常の観察方法とは別の方法をその基本的な観察手段として採用しなければならないことになるのであるが、それはいったいどういう方法なのか、それを採用することは心理学が自然科学となることを妨げる大きな要因とならないのか、このような点について次に考察してみたい。

四 内観的方法の限界と意義

心の状態、意識のありさまを観察する手段として心理学が採用する方法は、「内観的方法 (Introspection)」と呼ばれているが、それは何も心理学者が初めて見いだした方法などでは決してなく、本来「自らを省みる」、「反省する」といった日常的にごく頻ぱんに行なわれている心的行為を一般化したものといえる。

心理学における「内観的方法」に対する評価は、一般的にいつて、極端に二つに分かれているといつてよい。一方は、内省的判断は無誤謬であるという主張で、伝統的な合理主義に立つほとんどの哲学者をはじめ、ブレンターノらの心理学者がそれに当たる。他方で、内省的方法及びそれによって得られた知識は不確実、あるいは全く無価値であるという主張があり、ヒュームをはじめとした経験主義の哲学者、コントやモズレーといった実証主義の科学者、さらにジェイムズの後の世代としてはスキナーやライルを中心とする行動主義の心理学者、哲学者の間で典型的にみられる。ジェイムズにいわせれば、前者の根拠は、唯一経験的であつて、これまで反省によつ

て得られた自分自身の内面に関する知識が、他のものによつて裏切られたことがないという理由から、これまでどおり内観を信頼してよいと見なされてきたのだという。

確かに心的経験に伴う私的な特性 (mental privacy) からすれば、ある人の心に生じている心的出来事は、決して直接的には他者に知られることはないのだから、当人の心の状態を知るためには、当人自身による反省にたよるしかないようにも思われる。しかしながら、そのことがそのまま内観によつて得られた知識は直接的で、誤ることがないということになるわけではない。

ジェイムズは内観的方法に対しそれを柔軟な姿勢で受け入れている。つまり、ジェイムズは内観的方法が心理学の主要な方法であることを認めてはいるが、だからといつてそれに強く固執し、それに様々な制限を加えることによつてその妥当性を確保するという方向はとらなかつたのである。ジェイムズは、内観的方法はそれにかなる手続き上のルールを設けようともし、それだけで内観が科学的方法として十分に通用するものになるとは考えていない。ジェイムズは初期の心理学論文「内省心理学に見落とされたもの」の中で、内観的方法が不完全であり、それに頼りすぎることは、心の生活の全体的な働きの中から、様々な重要な要素を見落とすしてしまうことにもなりかねないと警告している。このような傾向は一般に「心理学者の誤謬 (Psychologist's Fallacies)」と名付けられ、心理学者自身が心的現象を把握するそのあり方を、知らず知らずのうちに心理現象そのもののあり方と混同してしまふところから生じるといふ¹⁴⁾。

心理学者が把握しようとする心的生活それ自体と云うのは、ジェ

イムズの言葉を借りれば、「驚嘆すべき意識の流れ」のことである。それはいつもある一定の速度で流れているわけではなく、あたかも「梢を飛び渡る小鳥のように」ある時は素早く、またあるときは比較的静止しているかのように、きわめて不規則な変化を伴っている。このような不規則性が心の実体なり、法則性なりを探索しようとする心理学者をして数々の誤謬へと誘い込むことになるジェイムズは考える。

注目すべきことに、ジェイムズは心理学者の心に対する内省的観察に及ぼすことばの影響をきわめて重視し、心理学者が観察記述の用語に概して日常言語を採用していることから生ずる誤謬の代表的なケースとして次の四つものを挙げている。

(一) ある種の主観的事実を表現する際、それに見合う適切な語彙が不足し、あるいは存在しない場合がある。その際人はしばしば客観的事物を引き合いに出して、例えば「だいたいの色」「チーズのような味」といった表現を用いるが、そのことは同時に、引合いに出された客観的事物の持つ他の性質をも当の性質のうち引き込むことになる。

(二) 我々は一般に現象を何らかの言葉で名指しする際、その現象の背後にある実在的な実体を想定し、その言葉が他ならぬ当の実体の名称であると考える傾向を持つ。

(三) (二)とは逆に、ある現象を指示する適当な言葉が存在しない場合、そこには何等の実体も存在しないと考える傾向がある。さらにそれはそのような現象そのものを軽視し、さらには無視する傾向へとつながる。

(四) ある主観的な現象と他の主観的対象が同じ言葉で表現されただけなら、二つの現象は同一の心的事象と見なされる傾向がある。このことにより、「心の流れの連続的流動性が犠牲にされ、その代わりに原子論、すなわち心の煉瓦片からなる構造論が説かれることになる。しかしながら、その存在を支持するような内省的根拠が見いだされることはなく、いまだ心を研究するものにとって嘆かわしい遺産となったあらゆる種類のパラドックスと矛盾を引き起こすものになっている。」⁽¹⁵⁾

このような心理学者の陥り易い過ちのいくつかのパターンは、心理学者が心的生活のうち、比較的固定し、輪郭のはっきりした「実質的部分 (substantive parts)」ばかりを強調し、その間に存在する動的な領野である「推移的部分 (transitive parts)」を軽視し、あるいは否定する傾向を持つて示している。このような傾向性は、ひいては心的生活の過程を全体として把握、評価することの失敗へとつながるわけである。

ここには心の持つ全体的な特性が、内観に代表される方法によって、日常的な概念、あるいは日常的な言語表現に還元できるという主張すらも拒んでいるジェイムズの敵しい非還元主義的な態度が表れているように思われる。

五 結語——ジェイムズ心理学の方法と折衷主義

ジェイムズが内観の方法を必ずしも完全ではなく、むしろ心理学の方法としては不十分なものであると考えた理由は、前節でみた通り、全体としての心的生活が充分かつ正当に記述、評価され得ない

という点にあった。とすれば心理学が科学として自立するための必要な方法はいかにして整備されるのかという問いに対して、ジェイムズはどのように考えているのだろうか。

少なくともジェイムズ自身それに対する確固とした回答を持ち合わせていたわけではない。心理学がようやく哲学的思弁から脱却し、独立した学問分野としての自立の第一歩をまさに歩まんとしていた当時、ある心理学者のグループは内観的方法を心理学の枢軸となる方法として確立しようとし、また別のグループは動物を用いた比較的方法として確立しようとする、さらにまた別のグループは解剖学的、生理学的な研究方法を心理学の基礎と見なそうと試みていた。それぞれのグループは自分達が採る方法の利点をことさらに強調し、欠点についてはそれを深く掘り下げることはずせず、それぞれの理論構築に邁進し、さらにはイデオロギーを帯びた学派を形成するようになった。

それに対してジェイムズは、確かに内観的方法を心理学の主要な方法として認めてはいるが、成果の上がる限り、他の方法をも随時併用し、合わせて評価するといった折衷的な姿勢を保持している。それぞれの方法にはそれぞれの欠点があり、誤謬の源が付随しているわけだから、むしろそれらを制限すべきでなく、様々な方法を併用して用いることにより、それぞれの欠点、不完全さを補い合い、できるだけ心のあり方を全体的な観点から把握できるよう努力すべきだというのがジェイムズの心理学者時代を通じて終始変わらない基本姿勢であった。

本論第二節でみたように、ジェイムズはそもそも人間の科学的な

営みが物事一切の本質であるとか、真理そのものを把握しようといった科学に関する楽観的な希望は持ちあわせていない。科学はあくまでその都度の問題状況に直面した人間、そしてその集団が、何であれ、何等かの便宜を図って、経験の新たな側面を見いだし、生活の領野を拡張して行こうとする実践的活動の表れに他ならないのである。

科学的営みがまさに始まろうとしている場面では、そこにいかなる手段・方法が適応されるべきかについて、予め定まった原則もルールも存在しない。それらがうまく働くかどうかは、自由に試みられた結果初めて分かることであって、最初から不適切である、あるいは誤っていると否定され、あるいは制限を加えられるべき事柄ではないのである。

ジェイムズのこのようなプラグマティックな科学観はある意味で、無軌道、無秩序を肯定しているように見えるかもしれない。しかしながら、少なくとも人間が新しい発見を行おうとしている際にその方法ややり方についてとやかく指摘することが、しばしば何の益にもならないことは明白である。

もし心理学が、ジェイムズの時代と同じように、未だそのような状況にあるのだとしたら、そこに求められるのは、方法や理論相互の間でなされる制限や牽制ではなく、他の方法、手段の可能性に対し、開放された姿勢を保持し、お互いに協力し合うことであろう。そしてそれこそ、これまでの心理学の歴史の中で最もおそろかにされ、軽視されてきた点ではないだろうか。

次のジェイムズの言葉は、そのような彼の心理学に対する謙虚な

態度を最もよくあらわしてゐるようと思う。

私の見るところ、私の著書の主要な独創と貢献は、心理学における協力的活動の実効的な基礎を提案したことにあつた⁽¹⁹⁾。

心理学は、現在に至つても、何のから統一原則もたぬ理論ではない。一つは、そのもとめられるところの状態は、そのもとめられる状況において、シームレスの協力的活動と同一であることが、あつて意義深い提案であることは、巨半前も今も変わつてなかつたのである⁽²⁰⁾。

注

- (1) Sigmund Koch, "Psychology cannot be a coherent science", *Psychology Today*, September, 1969, p. 54.
- (2) Cf. K. R. Wurtz, "A Survey of Important Psychological Books", *American Psychologist*, vol. 16, 1961, pp. 192-194.
- (3) William James, "A Plea for Psychology as a 'Natural Science'", in *Essays in Psychology*, Massachusetts: Cambridge University Press, 1983, p. 270.
- (4) Sigmund Koch, *ibid.*
- (5) James, *ibid.*, p. 271.
- (6) James, *Pragmatism*, Massachusetts: Cambridge University Press, 1975, p. 92.
- (7) James, "A Plea for Psychology as a 'Natural Science'",

p. 273.

(8) James, *ibid.*, p. 271. [] 内は筆者。

(9) *Ibid.*, p. 272.

(10) *Ibid.*, p. 271-272.

(11) Owen J. Flanagan, *The Science of the Mind*, Massachusetts: The MIT Press, 1984, pp. 23-24. [] 内は筆者。

(12) James, "Are We Automata?", in *Essays in Psychology*, p. 41.

(13) James, *The Principle of Psychology* vol. 1, Cambridge: Harvard Univ. Press, 1981, p. 214.

(14) James, "On Some Omissions of Introspective Psychology", in *Essays in Psychology*, pp. 142-167.

(15) James, *ibid.*, p. 195.

(16) James, "A Plea for Psychology as a 'Natural Science'", p. 275.

(17) 大石みね・のりかず 筑波大学大学院哲学・思想研究科
在学中)